

書評

保岡啓子著

『脳死・臓器移植と向き合うために——医療者・レシピエント・ドナー家族への聞き取り調査から』
(晃洋書房、2019年)

森岡 正博

本書は、医療人類学を専攻する保岡啓子が日本の移植医、レシピエント、ドナー家族にインタビュー調査を行ない、普段は表に出てきにくい彼らの生の声を分析したものである。日本ではこれまで多数の脳死臓器移植関連の書籍が刊行されてきたが、彼らの声をこれほどクリアーに析出したものは前例がなく、その意味で注目される。長年にわたる研究で、保岡はいくつかの発見をしている。たとえば、ドナー家族とレシピエントが手紙を交換したり、直接面会したりすることが少しずつ行われてきているが、その際に彼らの間に心理的な支配関係が起きないように移植医は気を配り、ドナー家族も自分たちが恩着せがましくならないように配慮し、レシピエントもそのお礼として臓器を大切に自分が死ぬときに臓器提供することを考えている。このような相互依存的関係が明らかになった。

なかでも最大の発見は、著者がドナー家族6名に2003年と2014-16年の二回にわたって調査をして、臓器提供に対する意見の変化を調べ、そのうち3名は後悔から満足に変化し、2名は満足から後悔に変化し、1名は満足が維持されたことを見出した点である。満足へと変化した3名は、移植者スポーツ大会やドナー家族の会における人間関係を経て臓器提供に関するわだかまりを癒すことができた。これに対して、当初は満足していた2名はともに臓器移植をしたことを誇りにして啓蒙活動を行っていたが、その後、活動から身を引いている。著者は彼らの知人たちを通じて、実は臓器提供に賛成できない気持ちを心の奥底に抱えていたことを知る。このような当事者たちの気持ちの揺れを再調査によって浮かび上がらせたことは、貴重な知見となった。

本書は脳死臓器移植を考えるうえでの必読書であるが、生命倫理学の視点からすると掘り下げ不

足と感じられる点もあった。著者は医療人類学的な視点からインタビューを行ない、語り手の言葉をたんと受けとめて記述し、考察を加える。そうであるがゆえに、彼らの語りの内容への批判的視点が抑制されている。たとえば、移植コーディネーターが、「いのち」を贈りたい人がいて、「いのち」を待つ人がいるのに、なぜ「いのち」がつかないのかと主張するとき、それに対して批判的なコメントを加えることをしていない。このような言説は20世紀から存在したが、現状の脳死臓器移植の多数は脳死の人本人の意思にもとづいてなされているのではなく、本人意思不明のまま家族同意でなされている点に注意を払わなければならない。すなわち、それらのケースにおいては、「いのち」を贈りたい人は臓器の所有者であった脳死の人本人ではないのである。なぜ家族が脳死の人本人の「いのち」の代弁者になれるのかは、さほどクリアーではない。これをめぐって過去には家族による「忖度論」も提唱された。しかしそれが適用され得るのは大人の場合であり、生後1-2歳の小児脳死移植の場合には適用不可能であろう。

著者も本書で紹介しているように、家族が同意する理由として、脳死の人の一部がレシピエントの体内で生き続けてほしいという願いがあるのはよく知られている。しかしその願いは、いみじくも語り手のひとりが述べているように、人類愛というよりも、ドナー家族のエゴであるという面がある。このように、臓器の所有者は誰なのか、そして脳死の人本人の意思とは何なのかという根本問題をさらに理論的に追い詰める作業が残されている。

さらに本書の調査では、臓器移植の医学的可能性があっても移植を拒んだ患者たち、そして脳死の人からの臓器摘出を拒んだ家族たちへのインタビューがなされていない。彼らはなぜ移植や臓器摘出を拒んだのかについていねいな調査を行ない、それを本書の知見と照らし合わせることで、著者の研究はさらに豊かなものとなるはずである。